

公益社団法人
日本演劇興行協会

会報 No.62

2022 SUMMER



博多座

博多座は、経済界・興行界・行政が一体となって演劇興行をおこなう日本初の「公設・民営の常設劇場」として一九九九年に誕生しました。「芸どころ博多」の象徴として親しまれる、九州最大級の劇場です。歌舞伎、ミュージカル、宝塚歌劇、芝居、歌手による座長公演など幅広く多彩な演劇ジャンルに対応する舞台機構を有しており、特に開場当時は、帝国劇場以外でオリジナル演出版のミュージカル『ミス・サイゴン』を上演できる劇場として大きな話題を集めました。どの席からも見やすい座席の設計、優れた音響設備、活気あふれる売店ロビーなども魅力で、全国の演劇ファンに愛されています。毎年、五月下旬には『六月博多座大歌舞伎』に出演する歌舞伎俳優らがご当地到着を知らせる「船乗り込み」が行われ、博多の初夏の風物詩となっています。

(令和二年、三年、四年は中止)



目次

理事インタビュー……………	2
二〇二一年度 助成金受賞者と授賞理由……………	7
帝劇と山田五十鈴さん……………	10
二〇二二年 理事会・総会議事録 報告事項……………	18

日本演劇興行協会理事インタビュー

株式会社博多座代表取締役社長 貞 刈 厚 仁



地学部とアイスホッケー

— 演劇の原体験をお教えてください。

幼少期、北九州の若松に住んでいました。その頃、保育園の学芸会で「いたずらカラス」役を演じた記憶があります。ヒール役の準主役で、最後は

反省をして泣く役でした(笑)。自分から手を上げたわけではなく先生に指名されたのでしようが、体が大きかったのでそういう役だったのかなと思います。

毎年、母に連れられ福岡県南部の八女に帰省した際には、八幡宮境内で行われる露天の「移動映画館」に夢中になっていました。スクリーン代わりの布に幻灯機でフィルムを投影する簡単なものですが、昭和三十年代はそれが娯楽でした。テレビでは、ヴィック・モロー主演の「コンバット」(日本での放映は一九六二〜六七)や、井上ひさしさんの「ひょっこりひょうたん島」(一九六四〜六九)は欠かさず見ていましたね。シベリア抑留から帰還した父はその影響からか大変に厳しい人で、「自分は死んでいった戦友たちのために生きている。お前も遊んでる暇があったら勉強して世のため人のためになれ」が口癖。そのため演劇や映画には無縁で、かといって勉強も好きにはなれず、日が暮れるまで草野球に興じる子供時代でした。

— どのような学生時代を過ごされましたか。

高校では地学部に入部しました。ちょうどアポロ一一号が月面着陸に成功(一九六九)した頃です。望遠鏡で初めて覗いた木星とガリレオ衛星には感動しました。宇宙空間の大きさと人類の存在の小ささを実感し、そのおかげで視野も広がったのではないかと思います。当時はベトナム戦争が泥沼化して学生運動もピークの時期で、社会は騒然としていました。高校はいわゆる進学校だったので、偏差値の高い大学に行くための勉強に意味が見いだせず、鬱屈した毎日でした。

九州大学に入學すると、地学部の反動から今度はアイスホッケー部に入ります。札幌オリンピックを観てガンガンやるのが面白そうに迷わず入部しました。アルバイトをしてお金を貯めて、強豪・北海道大学の夏合宿にも参加して腕を磨きましたね。弱小チームを強くするために汗をかく中で、今に繋がる多くの人と出会えたことは、私の最大の財産です。そういえば、練習をしていた福岡ス

ポーツセンターのリンクには映画館が併設されていて、練習の合間に時々映画も観ました。黒澤明監督の『デルス・ウザーラ』（一九七五、第四十八回アカデミー賞、外国語映画賞）は心に響く作品で印象に残っています。

四十二年勤めた福岡市役所

——大学卒業後の一九七七年、福岡市役所に入庁されます。仕事上での転機となるような出会いや出来事がありましたらお聞かせください。

市役所では様々な経験をしましたが、大きなものとしては、一九八九年に福岡市で開催されたアジア太平洋博覧会に最初から最後まで五年間携わり、企画・展示・演出を担当しました。展示や参加団体を決めていく過程はまさに体当たり。今のように入インターネットで簡単に情報を得ることもできず、雑誌や書物である程度の目星はつけても、最後は直接現地に行つて聞くしかなく、アジア各国を飛び回り得難い経験をしました。

期間中はエスニック・ゾーンの野外ステージを担当、国際交流基金の補助もいただいて、アジアの本場のパフォーマンスを種々披露しました。インドネシア・バリ島の『ジョゲブンブン』の公演には坂東玉三郎さんが駆けつけてくださいました。今年二月の『坂東玉三郎特別舞踊公演』の際には、当時の話で盛り上がりましたね。最終的には予想を上回る八三〇万人の来場者を達成し、その後の

「アジアの交流拠点都市作り」の起爆剤になりました。

二〇〇〇年から三年間は、都市開発部長として破綻した大規模再開発事業の後始末をすることになりました。出来たばかりのショッピングモールを民間に売却することで最終的には銀行団に四五〇億円の債権放棄をしてもらうことできるよう解決。その時の厳しい経験は、その後、仕事をするうえで貴重なものになりました。人間、修羅場をくぐらないと見えないもの、分からないものがあると思います。

副市長としては六年間、高島市長を補佐して「アジアのリーダー都市づくり」を進めました。アジア太平洋博覧会の開催趣旨を引き継ぎ設けられた「福岡アジア文化賞」（一九九〇年創設）、「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」（一九九一～二〇二〇年）は総務企画局長・副市長の所管でしたので、審査委員会副委員長としてアジアの文化・学術の発展に大きく貢献した皆様と接する機会があり、聡明で気骨ある受賞者を知り得て知見を広げることが出来たのは幸運でした。



「挑戦すること」での変化

——四十二年間福岡市政に携わられ、そして二〇一九年六月、博多座社長に就任されます。

社長就任時点での累積が二億円余でした。社長退任時には累積解消したいと思って来ましたが、その年、二つの興行が大赤字。更に、コロナ感染拡大もあり結果的に累積が八億円余に増えました。反転攻勢をと思った二〇二〇年は年初からコロナが拡大して大変な状況に。開場以来、初めて経験する長期休演、融資を受けるのも初めてでした。

そんな折、興行の世界が長いプロモーターの方と面談しました。「この世界は勝ったり負けたりで



位の高いものから順次取り組んでいます。リーダー以上の管理職に対しては、適宜、経営数値を伝え、危機感を共有してもらっています。貸借対照表を見るのは初めての社員がほとんどですが、具体的な数字を見ながら、社員一人一人が仕事にどう向き合っていくか役割を果たしていくかを考え行動できるようになって欲しいと思っています。

博多座は改革を断行するというより、社員の意識改革と併せて改善を積み重ねていく会社だと思っています。そのためには社員のベクトルを合わせていくことが肝要。まずは、危機感の共有による事業の不断の見直し、生産性の向上、社員が気持ちよく働くことの出来る環境作り。具体的には、パワハラやセクハラ、不適切な事務処理がないようコンプライアンスの徹底や、女性がライフプランを実践できる能力を存分に発揮出来る環境整備に継続して取り組んでいきたいと考えています。

——福岡市役所時代の経験で、現在の博多座での仕事に影響を与えていることはございますか。

市役所での四十二年の間には、大きな事業や火事場の火消しのような仕事、大きな組織をまとめる仕事もしてきました。仕事と言うのは解決すべき対象によりアプローチが異なります。周りの反応を気にせずトップダウンで一気にやるしかない時であれば、組織力を活かしてボトムアップで粘り強く対処するしかないケースもありました。

博多座は興行会社ですから市役所の仕事にはないものがあります。どれだけお客様に観ていただくかは、やってみないと分からないところがありますし、興行界独特の段取りもあります。ただ、経営の中核となる事業管理や人事管理が大事なものは同じ。ですから、共通することの方が多いと感じています。たとえば組織というのは、大きくても小さくても縦割りになりがちで横連携が難しい。博多座もその横連携が弱かったのですが、小さい会社だからこそ緊密に連携できるはずだと。そこで、分かりやすい相関図「博多座の樹」を作成し、各部・グループの仕事全体の中を落とし込んで今後実施する事項も明示しました。「凡事徹底」と言いますが、当たり前のことを当たり前に出るようになることは大事だと思います。社員の皆さんは興行に対する熱い気持ちを持っています。そんな気持ちの一つにして、ベクトルをあわせ会社が一丸となることで、今以上にいい仕事が出来ればと思います。

——社員の皆さんには「挑戦する」ことの大切さをお話しされているそうですね。

博多座は開場して二十三年になりますが、松竹さん、東宝さん、明治座さん他のご協力を得て独立立ちしてきました。そこには、たくさんの方の経験やノウハウがあります。定番となった公演も多くあり、経営的にも有難いことです。ただ、客層を広げるためにも、そこに安住することなく新しい

すね」と言ったら「いやいや、この世界は負けが八割で勝ちが二割の世界です」とのこと。「お客様商売は厳しいな」と思ったものです。とはいえ、「そんなもの」と納得してはビジネスになりません。出たところ勝負ではなく、博多座の持つ経験やデータを活用しながら、黒字基調の経営が出来るよう努力をしていきたいと考えています。

興行収入を増やし、興行原価や販売管理費を抑え経営の安定を図るということについて、博多座には改善すべき点が多々あります。優先順



演目にも挑戦するように言っています。

例えば『VOICARION』です。人気の声優さんたちによる音楽朗読劇で、多くの若いお客様が来場され好評でした。組曲『虐殺』は、博多座では初の「こまつ座」さんの公演で好評を博しました。「ふかいことをおもしろく」の世界は、博多座の懐を深くすると思います。そして音楽劇『蜜蜂と遠雷』は、やはりコロナで集客に苦しむ九州交響楽団さんとのコラボ。クラシックファン・演劇ファン双方を広げる役割を果たせたかと思えます。昨年十二月の自主制作『博多座神楽まつり』は予想に反して満席となりました。今年十二月には、福岡アジア文化賞が縁で実現した『モンゴル国立馬頭琴交響楽団』公演を主催します。劇場ならではの環境演出をしてモンゴル大草原の音色を再現しよう、草原に漂うハーブの香りも流せないかなどと、今から張り切っています。

場内サービスでも挑戦の空気が出てきました。歌舞伎の舞台製作をされる絵師さんの作品を販売してみると高額にもかかわらず売れ行きが良く、通販も開始しました。隣接するホテル・オークラさんとのコラボで始めた「博多座ビール」の販売も好評です。お客様のために積み重ねていく努力は必ず実を結ぶと思っています。

博多の文化拠点として

博多座の社長に就任されてからほどなくして

コロナ禍となり、演劇界もその影響を大きく受けています。劇場としてどのような指針を持ち取り組みをされてきたのか、また、今後の劇場運営、演劇界への想いなどお聞かせください。

二〇二〇年二月、コロナの感染拡大が続く中で博多座では『市川海老蔵特別公演』二日目の昼過ぎに公演中止が決定しました。当日夕方の公演中止を周知することが出来ず、千人程のお客様がご来場されました。社員総出でお客様に事情説明しお引き取り願いましたが、市役所的感覺では「いろいろと厳しいクレームがくるだろう」と覚悟していたのです。ところが、クレームはひとつもなく逆にお客様から「大変ですね。頑張ってください」と労いの言葉をいただきました。「歌舞伎ファンの皆様、素晴らしい」と驚くと共に、こうしたお客様に支えられて博多座があるのだと教えていただきました。

その後、全国の劇場と同様に二〇二〇年は休演



が続き、再開後も五〇％制限と大変でした。観劇を控えるお客様も多く、そのような中で日本演劇興行協会さんをはじめとした関係者の皆様の尽力で、国の補助制度が創設され、博多座も存続することが出来ています。言葉で尽くせないほど感謝しています。

再開後の博多座では「博多座からコロナは出さない」との決意で、やれる対策は全てやりました。小さなことですが、オミクロン株に置き換わって以後はお客様に不織布マスクを無料配布しました。布やウレタンのマスクは感染防止効果が無いと判断してのことです。今はSNSの時代ですから、良いことも悪いことも直ぐに拡散します。不織布マスクの配布は「さすが博多座」と好感を持って伝わりました。一つ一つの積み重ねも大事だと思えます。

歌舞伎公演については感染対策としてコンパクトな公演を行いました。公演リスクを減らすため



に通常より公演時間を短くして、人頭も縮小することで松竹さんと協議をさせてもらい、ご理解・御協力をいただきました。歌舞伎通の方から見れば少し物足りないとは思いますが無事に公演出来ており良かったと思っています。

昨年の後半からはお客様が戻ってきました。二〇二〇年は「不要不急」の代名詞のような存在でしたが、豊かな市民生活に演劇は不可欠なものと改めて思いました。「たかが劇場、されど劇場」ではないでしょうか。

——コロナ禍を経て、お客様も改めて劇場という存在の大きさを感じるようになったのではないかと思います。

劇場は面白い空間だと思います。俳優さんや役者さんたちの息遣い、小気味良いオーケストラの響き。それらが、時代や国を超えて「非日常の世界」を創り出し、あるいは身近な「日常の世界」からメッセージを発信し、時に「煌びやかな世界」で心を開放してくれる。私たちは社会の中でしか生きていきませんが社会には理不尽や不条理が付き物です。人それぞれに悩みや問題を抱えています。演劇にはそんな人の心を浄化してリセットさせる力があるように思います。ですから演劇は「不滅」です。

博多座は「演劇を通じて地域文化の発展を図る」ことを目標に一九九九年に開場しました。文化・カルチャーの語源は「耕す」と言われています。観

劇いただいたお客様の心を耕し新たな芽を出していただける劇場でありたいと思えます。毎年十二月の「市民檜舞台の月」において地域に根付いた伝統芸能や市民の演劇文化を披露してもらう中で新たな文化が芽吹くことを期待しています。そのためにも、これからも魅力ある優れた演目をお客様にご提供して参りますし、コロナ後も視野に入れた確かな経営を行い、末永く市民に愛される博多座でありたいと考えています。興行以外に収益源を持たない博多座の経営は正直楽ではありません。しかし、「芸どころ・博多」の文化拠点としての志を持って頑張っていく覚悟です。

(取材・文／高橋涼子)

「プロフィール」

さだかり・あつひと／一九五四年福岡県出身。一九七七年九州大学経済学部卒業後、福岡市役所入庁。一九八九年開催のアジア太平洋博覧会では準備室から終了まで企画・運営に携わる。九州大学統合移転の伊那キャンパス用地買収担当主査、都市開発部長として博多リブレイン・スーパープランドシテイ破綻での民間売却交渉、教員採用試験問題漏洩事件で揺れる教育委員会に教育次長として着任するなど、市役所時代は様々な経験を重ねる。総務企画局長・副市長として「アジアのリーダー都市づくり」推進の高島市長を補佐。二〇一九年六月より株式会社博多座代表取締役社長。



二二年度

助成金受賞者と授賞理由



有村 淳 殿



一九六六年四月生まれ 五五歳
衣裳デザイナー
授賞理由

一九九一年宝塚歌劇団に入団、宝塚歌劇の衣裳製作の分野においてさまざまな研鑽を重ね、多くの公演で衣裳製作の面からオリジナリティ要素を加え、数々の成果を上げてきた。

宝塚歌劇団以外の作品にも活躍の場を広げ、氏の手掛けた作品は多岐に渡り評価され、二〇一四年「ロックオペラモーツァルト」「春雷」の成果で

第二一回読売演劇大賞優秀スタッフ賞を受賞。今後更なる活躍を期待しての受賞。

受賞のことは

この度は日本演劇興行協会助成金を頂戴し、誠に有り難く存じます。大変光栄に思うと同時に身の引き締まる思いです。

宝塚歌劇団の衣裳デザイナーとしてキャリアをスタートさせてから、三〇年の月日が経ちました。現在では宝塚歌劇だけではなく、バラエティに富んだ様々な演劇のコスチュームデザインを手掛けさせて戴いております。

綿密な時代考証をもとに、当時使用されていた素材や型紙などを用いて製作する事もあれば、時にはそれらに現代感覚をミックスさせ、異素材を合わせたこれまでにない表現を試みることもあります。

また海外での衣裳製作や素材の開発、生地の手配なども積極的に進めて参りました。試行錯誤の

連続ですが、個性豊かな演出家やプロデューサー、俳優の皆さん、衣裳製作のスタッフと作品を作り上げていく過程は、常に新しい発見と刺激に満ち溢れ、何ものにも代え難い喜びを感じる毎日です。世界が未曾有の出来事に見舞われる中、演劇界もこれまでにない変化を求められています。そんな厳しい状況下においても演劇の持つ力を信じ、この度の榮譽に恥じることのない魅力的なコスチュームの製作に、今後も邁進して参りたいと存じます。

最後になりましたがご推薦くださいました東宝株式会社様、心からの感謝を捧げます。



笹森 英樹 殿



一九五三年一月生まれ 六七歳
レコーディングエンジニア
授賞理由

レコーディングエンジニアとしてコンサートやテレビコマercial音楽の録音に携わってきた。二〇〇三年松竹ショウビズスタジオ株式会社入社。歌舞伎、新派、新喜劇、ミュージカル等の演劇場の音響・効果の録音・編集に取り組む。二〇一三年から新作歌舞伎を始め様々なパフォーマンスのサイズに合わせた歌舞伎パート音楽を古典の約束事を踏まえた中での製作に取り組んでいる。この技術を後生に伝えることを期待しての受賞。

受賞のことば

この度は、日本演劇興行協会様より、このような榮譽ある賞を賜り心より厚く御礼申し上げます。古典の約束事を踏まえた録音・編集等の技術力が卓越しているレコーディングエンジニアとして評価されましたことは身に余る光栄でございます。

ブナの原生林として世界自然遺産に登録された白神山地の日本海側、地面に積もった粉雪が強風で舞い上がる地吹雪が冬の風物詩となっております津軽の風土の中で、ラジオから流れるビートルズの音楽は、衝撃で私の人生を決めました。

東京に出て、放送技術を勉強いたしました。アシスタント・エンジニアとして修業、二八歳の時に独立してフリーランス・エンジニアになりCM音楽やレコードの制作に携わりまして、マイクロフォンや音響機材について、ドラムやベースやボーカルの収録について等々様々な技術を吸収すると共に、邦楽の収録のスキル向上に務めました。相談役の舞台音響家辻亨二氏に認められ、演劇の様々なジャンルの舞台を手掛けてこられた内藤博司氏の薫陶により伝統音楽の魅力を引き出す技術力を習得できたと感謝致しております。

今までに関わって下さった全ての方々には心より感謝申し上げます。邦楽の魅力がグローバルに浸透するよう後進の育成・次世代への継承に邁進してまいります。





一九三三年生まれ 八九歳

舞台装置家・グラフィックデザイナー

授賞理由

長年にわたり舞台装置家として数々の舞台装置をデザインし多くの公演に携わってきた。

藤田まこと公演、中村美律子公演、藤山直美公演、OSK日本歌劇団等多くの公演の舞台に関わり、貴重な道具帖を作成保存している。また開局したばかりのテレビ番組に携わりテレビタイトルのデザイナーとして活躍。「新婚さんいらっしゃい」等現在も放送中の番組の担当もしている。氏のこれまでの功績を讃えての受賞。

受賞のことば

母親に連れられよく観劇に出かけていました。一九四七年、中学二年生の時、「ロミオとジュリエット」を観たときの感動が元で将来舞台装置の仕事がしたい！と強く決意しました。

芝居のことは何も知らない素人です、裏方志望

でしたが、役者さんを育てる教室に入所し芝居のイロハを教わりました。

同時に、当時「凶案屋」と言われていた、現在で言うデザイン会社で学校に通いながら七年間無給で修行する機会にも恵まれました。

おかげさまで、印刷デザインや文字のことなど、グラフィックデザインの基礎を構築できました。

一九五六年に大阪テレビ放送(現在の朝日放送テレビ株式会社)が開局しました。

当初はテロップ係として奮闘していましたが、今思えば七年間の修行のおかげで、大阪初のテレビタイトルデザイナーに成れたのだと思います。

舞台装置もその頃から手がけはじめ、日本各所の商業劇場や他からも装置デザインのお仕事をいただけるようになりました。

テレビでは、「剣客商売」「鬼平犯科帳」「必殺」シリーズやNHKの時代劇および時代劇専門チャンネルなどのタイトルロゴ制作を担当させて頂いております。

永い年月この仕事をさせて頂いております。

昭和という日本の高度成長期に現役で居られたのも良き運であったと感謝しております。

これからもますます、この嬉しい舞台装置デザインやテレビおよび映画のタイトル文字の仕事が続けたいと願っております。

命が続く限り、日々修行と鍛錬です！



帝劇と山田五十鈴さん お堀端に咲いた大輪の花

演出家 北村文典

新帝劇が昭和四十一年（一九六六）に開場してから二十一世紀を迎えるまでの間、山田五十鈴さんは四十本以上の帝劇の芝居に出演し、そのうち三十回もの主演をつとめております。まさに帝劇の歴史に残る座頭女優として、舞台上に立ち続けてまいりました。

新開場の二年後（一九六八）に、私は東宝（株）演劇部に所属しました。研修期間の東京宝塚劇場の舞台袖で初めて見た山田五十鈴さんの美しき、オーラの大きさに圧倒されたことを今でも思い出します。

帝劇での山田さんとの初仕事は、昭和四十四年（一九六九）の三島由紀夫・作『癩王のテラス』でした。

舞台一面に石造りのアンコールワット・バイオンの大寺院、森の奥から巨象に股がって凱旋する若きジャヤバルマン王（北大路欣也）、出迎える王太后チューダーマニ（山田五十鈴）の満面の笑顔が忘れられません。

続いて昭和四十六年（一九七一）、「山田五十鈴・舞台生活三十五周年記念」として毎公演劇中に大勢のゲストが登場した五十鈴十種のひとつ『淀どの日記』の成功を契機に、翌年から榎本滋民先生と山田五十鈴さんのコンビによる「日本美女絵巻」シリーズがスタートしました。王朝時代の「浮かれ式部」から「静御前」「顔世御前」「お市の方」「千姫曼荼羅」、江戸期に入ってから「伊達小袖」「昭和五十二年度文化庁芸術祭演劇大賞受賞の「愛染め高尾」、極悪非道の悪女「逢坂屋花鳥」明治時代の名優・市川久女八を題材にした「女

役者」など、時代を越えた女性像を演じて、女優でありながら女形芝居ができる舞台人と呼ばれたりもしました。この評価は花柳章太郎丈、長谷川一夫丈や多くの歌舞伎界の方々との共演を重ねた





り、指導を受けるなかで、山田さん自身が熱心に表現術を磨いてこられたからだと思います。女形と違って女優の中には、悪女役をやると世間の目が役の人物と混同してしまつて、女優その人のイメージダウンにつながることを恐れて敬遠する人が多いと聞きますが、山田さんは「逢坂屋花鳥」の折に、要は役の性根をつかんで、善悪の心が混在する人間を演じ切るとの考えで、徹底した悪女の表現を見せてくれました。また、五十鈴十種の「香華」の郁代役は、母性をもちえず奔放に生きる人物像のため、まさに山田さんにピッタリ、演技ではなく地のままであるがとの劇評に、地のままでやれるなら、役者なんていらさないわよと破顔一笑。その憎めないかわいらしさを加えた表現は、とも

すれば否定されるべき郁代像を、現代性をもった肯定される女性にまで作り上げておりました。

役づくりといえば、以前、新国劇の「修羅」の巴御前の稽古中に、薙刀なみなたのさばきがどうしてもうまく出来ず、小道具の薙刀を当時常宿にしていた帝国ホテルまで借りて帰ったそうです。夜中に浴衣を打ち掛けがわりに羽織つて稽古を始め、さらに熱中してホテルの廊下を花道に見たてて演じているうちに、オートロックのドアが閉まってしまい部屋に戻れず、しばし深夜に薙刀を手にして仁王立ちする山田さん：通りかかったボーイさんが事情がわからず飛び上がって驚いた…という話をしてくれたことがあります。

芸のためには時も場所もないという山田さんですが、自分の役について脚本の書き直しや台詞の変更等を申し入れたことは一度もありませんでした。それは映画時代から舞台にかけて、巨匠の監督や大作家、演出の先生方に、一から厳しく指導を受けておりました。役者の仕事は、いただいた脚本を忠実に一言一句を的確に表現すること、それが天命という姿勢をつらぬき通してこられたからだだと思います。

輝かしい芸歴と人気を保ちながらも、新人のような謙虚さを持つて芸に取り込むことから『女坂』や『華岡青洲の妻』『ながれぶし』などの名作が生まれました。

私も平成に入つてからの帝劇で『横浜どんたく』『徳川の夫人たち』『花のうさぎ屋』などの演出を担

当しました。

出会いの縁から糸を紡いで半世紀近くが過ぎました。思い出は尽きることはありません。

『お堀端に咲いた大輪の花』のごとき稀有のスーパースターと一緒に舞台の上で芝居づくりが出来ましたことは、私の大きな喜びであり誇りです。生涯の宝物と思ひ感謝いたしております。



山田五十鈴十種

昭和六十二年(一九八七)東宝演劇部は、一般に公募して山田五十鈴主演の過去二百本の舞台から、ファン投票による代表作十本を選んで、「五十鈴十種」とした。

昭和六十三年(一九八八)一月 帝国劇場
五十鈴十種 第一回記念公演として
帝劇新春特別公演『女坂』が上演された。

『五十鈴十種』 全二五二三回公演

『狐狸狐狸ばなし』 おきわ 上演回数二六八回
昭和三十六年(一九六一)一・二一九～二・二二六
東京宝塚劇場 初演三十八回
北條秀司 作・演出
森繁久弥、三木のり平、中村勘三郎
。昭和三十六年(一九六一)十一・一～二六
大阪新歌舞伎座 二六回
。昭和三十八年(一九六三)十一・二～二七
明治座 二六回



。昭和六〇年(一九八五)十・四～三〇
東京宝塚劇場 四十五回
。平成五年(一九九三)一・二～一〇
東京宝塚劇場 三十三回
北條秀司・作・演出／本間忠良・演出
芦屋雁之助、平幹二郎



『香華』 郁代 上演回数七六六回

昭和三十八年(一九六三)九・三～十二・二三
芸術座 初演六十八回

有吉佐和子 原作／中野實 脚本・演出

香川京子、浜木綿子、一の宮あつ子、市川中車

。昭和三十九年(一九六四)三・七～二十二

名鉄ホール 二十七回

。昭和五〇年(一九七五)五・五～六・三〇

芸術座 八十三回

有吉佐和子・作・演出／大藪郁子・脚本



。昭和五十七年（一九八二）三・六～三〇

大阪朝日座 四十二回

。昭和五十七年（一九八二）九・二～二十五

大分、松山、丸亀、高松 四十三回

。昭和五十九年（一九八四）三・四～四・二十九

芸術座 八十一回

。昭和五十九年（一九八四）十一・三～二十三

京都南座 三十七回

。昭和五十九年（一九八四）十一・二十五～十二・五

北陸巡業 石川・富山・柏崎・新潟 十二回

。昭和六〇年（一九八五）三・三～二十七

名鉄ホール 四十二回

。昭和六〇年（一九八五）十一・二十五～十二・五

九州巡業 久留米・福岡・熊本・長崎 三十五回

。昭和六十一年（一九八六）十一・一～二十四

南座 四十一回

神戸国際会館 十一・二十五／二十六 四回

『新版 香華』 郁代

昭和六十三年（一九八八）十・四～二十八

帝国劇場 四〇回

有吉佐和子・原作／大藪郁子・脚本・増見利清・演出

山本陽子、田村高廣、曾我廼家鶴蝶、浅利香津代

淡島千景

。平成二年（一九九〇）一・二～二・二十七

帝国劇場 八十四回

。平成三年（一九九一）十一・一～二十六

御園座 四〇回

。平成八年（一九九六）一・二～二十九

東京宝塚劇場 四十三回

。平成八年（一九九六）五・二～二十八

劇場・飛天 四十四回



『女紋』 お敬 上演回数八十七回

昭和四十一年（一九六六）三・四～四・十七

芸術座 初演六〇回

池田蘭子 原作／菊田一夫 脚本・演出

瑳峨三智子、浜木綿子、一の宮あつ子、宮口精二

。昭和四十一年（一九六六）十・七～二十三

名鉄ホール 二十七回



『淀どの日記』 お市の方・淀どの（二役）

上演回数一九四回

昭和四十三年（一九六八）九・一～二十六

明治座 初演二十六回

井上靖 原作／依田義賢 脚本／榎本滋民 演出

松本幸四郎、中村又五郎、加東大介、中村芝鶴

市川中車、林与一、草笛光子、久慈あさみ

長谷川稀世

。昭和四十四年（一九六九）六・一～十五

中日劇場 二十九回

。昭和四十六年（一九七二）四・一～二十六

大阪新歌舞伎座 五〇回

。昭和四十六年（一九七二）九・二～二十七

帝国劇場 四十四回

。昭和六十四年（一九八九）一・二～二十九

東京宝塚劇場 四十五回

井上靖 原作

榎本滋民 脚本・演出／北村文典 演出

新珠三千代、酒井和歌子、遙くらら



丹阿弥谷津子、曾我廼家鶴蝶、南風洋子
 上村香子、香川桂子、江原真二郎、中村橋之助
 菅野菜保之、松山政路、大山克己、中村又五郎
 内山恵司、丸山博一



『千羽鶴』 太田綾 上演回数七十九回

昭和四十四年(一九六九)三・四、四・十三
 芸術座 初演五十二回
 川端康成 原作／榎本滋民 脚本・演出
 林与一(三月)平田昭彦(四月)
 村松英子、長谷川稀世、森光子
 。昭和四十四年(一九六九)九・七、二十、二十一
 名鉄ホール 二十七回



『女坂』 白川倫 上演回数二四二回

昭和四十五年(一九七〇)三・四、四・二十六
 芸術座 初演八十二回
 円地文子 原作／菊田一夫 脚本
 中村哮夫 演出
 乙羽信子、浜木綿子、三田佳子、三林京子
 森雅之
 。昭和六十三年(一九八八)一・二、二、二十七
 帝国劇場 四〇回
 円地文子・原作／菊田一夫 脚本／堀越真・脚本
 水谷幹夫・演出
 。昭和六十四年(一九八九)十・四、二、二十七
 近鉄劇場 三十九回
 。平成四年(一九九二)一・二、二、二十八
 東京宝塚劇場 四十二回
 。平成九年(一九九七)九・三、二、二十七
 東京宝塚劇場 三十九回



『菊枕』 三岡ぬい 上演回数八十四回

昭和四十九年(一九七四)五・四、六・三〇
 芸術座 初演八十四回
 松本清張 原作／小幡欣治 脚本・演出
 山本學、夏川大二郎、春日野八千代





『浮世節立花家橘之助たぬき』 立花家橘之助

上演回数四五一回

昭和四十九年(一九七四)十一・三〜十二・二十七

芸術座 初演七十九回

榎本滋民作・演出

日下武史、古今亭志ん朝、小鹿ミキ、夏川かほる

金原亭馬の助、江戸家猫八、一の宮あつ子

金原亭駒八、丹阿弥谷津子、緋多景子、内山恵司

青木玲子

。昭和五〇年(一九七五)十一・二〜十二・二十七

芸術座 八十一回

。昭和五十一年(一九七六)六・六〜二十七

名鉄ホール 四〇回

。昭和五十二年(一九七七)九・二〜二十四

朝日座 四十三回

榎本滋民作・演出

菅野菜保之、古今亭志ん朝、江戸家猫八、紅景子

内山恵司、金原亭馬の助、一の宮あつ子

丹阿弥谷津子、宮口精二

『新編 たぬき』 立花家橘之助

昭和五十六年(一九八一)十一・二〜十二・二十六

芸術座 七十九回

榎本滋民作・演出

古今亭志ん朝、安奈淳、海老名美どり

利根はる恵、江戸家猫八、村田正雄

。昭和五十七年(一九八二)十一・三〜二十八

朝日座 四十五回

新潟県民会館 十二・二〜二・三回

。昭和五十八年(一九八三)三・五〜四・二十九

芸術座

榎本滋民作・演出 「新編たぬき」昼夜通し公演

昼の部「いざ女天下」四十一回

夜の部「ただ芸三昧」四十回

『しぐれ茶屋おりく』 おりく 上演回数二四九回

昭和五十五年(一九八〇)五・四〜五・三〇

東京宝塚劇場 初演四十二回

川口松太郎 作/平岩弓枝 脚本

石井ふく子 演出

乙羽信子、浜木綿子、山口崇、里見奈保

金田龍之介、宮口精二

。昭和五十六年(一九八一)九・二〜二十五

大阪毎日ホール 四十一回

。昭和六十二年(一九八七)四・二〜二十六

梅田コマ劇場 四十三回

。昭和六十四年(一九八九)

平成元年九・二〜二十九

東京宝塚劇場 四十三回





〈たぬき〉をはじめ様々な作品で五十鈴さんが使用した楽器や見台

。平成五年（一九九三）四・二～二十六
 大阪新歌舞伎座 三十九回
 。平成五年（一九九三）九・二～二十八
 東京宝塚劇場 四十一回
 川口松太郎・原作／平岩弓枝・脚本
 小野田正・演出
 江波杏子、藤吉久美子、中村又五郎、山口崇
 真島茂樹、田村亮、大空真弓



『風子より 三味線お千代』 お千代

上演回数一九三回

昭和六十一年（一九八六）五・三～五・三十一

東京宝塚劇場 初演四十七回

平岩弓枝 作／小野田正 演出

古手川祐子、草笛光子、三田和代、菅野菜保之

松あきら、奈月ひろ子、立原博、曾我廼家鶴蝶

高橋昌也、山村聰

。昭和六十二年（一九八七）一・二～二十九

東京宝塚劇場 四十六回

。昭和六十二年（一九八七）十二～二十七

中日劇場 四十五回

。昭和六十三年（一九八八）十一・三～三〇

近鉄劇場 四十六回

神戸国際劇場 十二・二～六 九回

遙くらら、草笛光子、田村亮、菅野菜保之

三田和代、奈月ひろ子、五代路子、立原博

曾我廼家鶴蝶、山村聰、新珠三千代

ひとこと

『うちは父が役者（新派・山田九州男）でしたから、
 なった以上は一生つづける』と言われてましたので、
 それに第一、潰しがききませんもの』と話されたことがある。…潰しがきく人間…。
 女優しかできなかった山田五十鈴さん、
 女優のために一生を捧げた山田五十鈴さん、
 そして波瀾の人生を歩みつづけた山田五十鈴さん。
 潰しのきかない生き方が、どれほど素晴らしいものであるかを、長い年月、それも紆余曲折しながら辿ってきた果てに、身をもって私たちに示してくれている。



再現された楽屋には川端龍子筆「鈴」の額装

追悼弔辞



山田五十鈴さんのご冥福をお祈りいたします。その弔意のことばと共に皆様へのご報告を申し上げます。

五十鈴十種の一つ「淀」の日記が初演された昭和四十三年、私は東宝(株)演劇部演出部に入りました。山田さんにはじめてお会いしたのは、研修期間中の東京宝塚劇場の舞台袖でした。その時に感じた山田さんの美しさ、オーラの大きさを忘れることはできません。以来再演を含めて百本を越える山田さん主演の舞台にスタッフとして参加してまいりました。

しかし、出会ってから、ありがたい縁^{えん}の糸をつむいで半世紀近くの歳月が過ぎ、とうとうお別れの時がまいりました。

山田さんは日頃から、「自分の葬儀では華美に走ることなく質素を旨として、ご臨席の皆様にも、無言のお礼を申し上げたいという式にしてほしい」

と願っておられました。

そこで東宝株式会社をはじめとして、山田さんが住まいとしていた帝国ホテルさんのご協力をいただき、青山斎場での告別式となりました。

また、山田さんは生前にご戒名もいただいております、墓石も、あとは命日と享年を刻印するのみに造っておられました。「寶光院天猷妙津(ほうこういんてんゆうみょうしん)大姉」でございます。

日頃から天真爛漫とも見られていた山田さんが、これほどに緻密で周到な配慮をしておられたことに、私は心から敬服いたしました。

「日本美女絵巻シリーズ」と題されるように、山田さんはいろいろな時代のさまざまな女性像を演じることにより女優でありながら女形芝居の出来る舞台人と呼ばれておりました。多くの歌舞伎界の方々との共演を重ねてその指導を受ける中で、抜群の記憶力と柔軟な想像力とで自らの表現を磨き上げて役づくりをしていたのだと思います。

ひたすら、ひたむきという言葉どおり輝ける芸歴と人気を持ちながら、新人のような謙虚さを持つて芸にのぞむお姿は、生涯現役のエースピッチャーであり、四番打者でした。

平成十二年に文化勲章受章、翌年にサントリー小ホール・「桜の園」のラネーフスカヤ役で主演された舞台を、今でも思い出します。

三日前の七月九日、私は読売ランド慶友病院の病室に行きました。山田さんは荒い息の中で私の目を見てうなづいてくれました。看病をしてくれ

ている五十年來の付人の岸京子さんが、名作「たぬき」のライブカセットテープをかけると、浮世節「ふきよせ」のあざやかな三味線の音と軽妙洒脱な歌声が流れ出ます。山田さんは頭を少しゆらして調子を取っているように見えました。

それからわずか二時間後、午後七時五十五分、急変の知らせに再度かけつけた時にはベッドの上で二度と目を覚ますことなく静かに天上に昇られた山田五十鈴さん、その真白きお姿は、琵琶を奏でる弁財天の如くに、神々しく輝いて見えました。山田五十鈴さんと二人きりの病室には、天空から名作「たぬき」大詰幕切れの、立花家橘之助のセリフが聞こえてくるようでした。

『芸人世界の山のぼりには、もう先が無くなっただけ、芸の山のぼりは、まだまだ先があったんだね、あとはもう芸にとりくみ芸に遊ぶ…それだけが命ということか…』

山田五十鈴さん…おつかれさまでした…。
平成二十四年七月十二日

北村 文典

北村文典(通称ブンテン)

高知県高知市出身

昭和四三年 関西学院大学卒業 東宝(株)入社

菊田一夫・北條秀司・榎本滋仁・小幡欣治・花登筐・

三木のり平の演出助手として演出を学ぶ。

山田五十鈴・杉村春子・森光子等の演出担当。

時代劇・喜劇を中心に現在に至る。

代表作は『愛染め高尾』『晩菊』『桜月記』『放浪記』。

二〇二二年 理事会・総会議事録 報告事項

公益社団法人日本演劇興行協会の総会、理事会を書面及びオンライン会議を含め随時開催した。
また本年六月の理事会を二年振り対面で開催した。

理事会議事録

一. 日時 二〇二二年二月七日(月)午後二時

二. 場所 オンライン(Zoomシステム使用)

三. 議決権のある当法人理事総数 一三名

出席理事 一三名

安孫子 正、池田 篤郎、山根 成之、宮崎 敏明

三田 芳裕、松村 隆志、貞刈 厚仁、松田 和彦

糟谷 治男、坂巻政一郎、葛西 聖司

古井戸秀夫、曾田 修司

欠席理事 ○名

出席監事 二名

迫本 栄二、安藤 知史

事務局 二名

吉浦 高志、小金平恵津子

四. 議長 会長 安孫子 正

五. 開会

定刻に至り、吉浦事務局長が本日の理事会は定款第三四条の定足数を満たし、適法に成立した旨を告げた。議長は定款第三三条二により安孫子正会長が務めた。理事会議事録は、一般社団法人及

び一般財団法人に関する法律第九五条三項の規定に従って作成することになった。

六. 議事の経過の要領及び結果

【決議事項】

第一号議案 二〇二一年度脚本家養成講座受講料精算について
議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二一年度脚本家養成講座受講料精算についての説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

第二号議案 二〇二一年度補正予算案について
議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二一年度補正予算案の説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

第三号議案 二〇二一年度事業計画案、資金調達及び設備投資の見込みについて
議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二一年度事業計画案、資金調

達及び設備投資の見込みについての説明を行った。次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

達及び設備投資の見込みについての説明を行った。次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

第四号議案 二〇二一年度収支予算案について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二一年度収支予算案についての説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

第五号議案 二〇二一年度決議の省略の方法による社員総会招集について
議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二一年度社員総会招集を定款一八条の決議の省略の方法により行うべく招集する件についての説明を行った。次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

七. 閉会

議長は全議案の審議を終了した旨を告げ、午後二時四〇分閉会を宣した。

定時社員総会議事録

定時社員総会の決議があったものとみなされた日

二〇二二年三月一日

定時社員総会の決議があったものとみなされた事項の提案者

代表理事 安孫子 正

議事録の作成に係る職務を行った代表理事及び理事

代表理事 安孫子 正

理事 池田 篤郎

議決権を行使することのできる社員の総数

一四名

決議を省略する議案

第一号議案 二〇二一年度脚本家養成講座受講料

精算について

第二号議案 二〇二一年度補正予算案について

第三号議案 二〇二一年度事業計画案、資金調達

及び設備投資の見込みについて

第四号議案 二〇二一年度収支予算案について

第五号議案 議事録署名人選任について

代表理事 安孫子 正、理事 池田 篤郎を議事録署名とする件

二〇二二年二月七日の理事会の決議に基づき、

代表理事安孫子正が社員全員に対して定時社員総会の目的である右記事項について提案書を発し、当該提案につき、二〇二二年三月一日までに社員の

の全員から書面による同意の意思表示を得たので、

一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第五八条第一項に基づき、当該提案を可決する旨の社員総会の決議があったものとみなされた。

理事会議事録

一. 日時 二〇二二年六月七日(火)午後二時

二. 場所 東京プリンスホテル

三. 議決権のある当法人理事総数 一三名

出席理事 二二名

安孫子 正、池田 篤郎、山根 成之

宮崎 敏明、三田 芳裕、松村 隆志

貞刈 厚仁、松田 和彦、糟谷 治男

坂巻政一郎、葛西 聖司、古井戸秀夫

欠席理事 一名

曾田 修司

出席監事 一名

迫本 栄二

事務局 二名

吉浦 高志、小金平恵津子

四. 議長 会長 安孫子 正

五. 開会

定刻に至り、吉浦事務局長が本日の理事会は定

款第三四条の定足数を満たし、適法に成立した旨を告げた。議長は定款第三三条二により安孫子正会長が務めた。理事会議事録は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第五三条三項の規定

に従って作成することになった。

六. 議事の経過の要領及び結果

【決議事項】

第一号議案 二〇二一年度事業報告承認について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二一年度事業報告の説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、

全員異議なく承認可決した。

第二号議案 二〇二一年度決算報告承認について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二一年度決算報告の説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、

全員異議なく承認可決した。

第三号議案 退会会員の未収金精算について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から退会会員の未収金精算についての説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、

全員異議なく承認可決した。

第四号議案 二〇二一年度決議の省略の方法による社員総会招集について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二一年度決議の省略の方法による社員総会招集についての説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、

全員異議なく承認可決した。

七. 閉会

議長は全議案の審議を終了した旨を告げ、午後二時四十分閉会を宣した。

定時社員総会議事録

定時社員総会の決議があつたものとみなされた日

二〇二二年六月二四日

定時社員総会の決議があつたものとみなされた事項の提案者

代表理事 安孫子 正

議事録の作成に係る職務を行った代表理事及び理事

代表理事 安孫子 正

理事 池田 篤郎

議決権を行使することのできる社員の総数

一四名

決議を省略する議案

第一号議案 二〇二一年度事業報告承認について

第二号議案 二〇二一年度決算報告承認について

第三号議案 理事の任期満了に伴う改選について

現理事一三名の内、左記九名を理事に再任する件

安孫子 正、池田 篤郎、山根 成之

宮崎 敏明、三田 芳裕、貞刈 厚仁

松田 和彦、糟谷 治男、坂巻政一郎

第四号議案 議事録署名人選任について

代表理事 安孫子 正及び理事 池田 篤郎を議事録

署名人とする件

二〇二二年六月七日の理事会の決議に基づき、

代表理事 安孫子正が社員全員に対して上記定時社員総会の目的である上記事項について提案書を発し、当該提案につき、二〇二二年六月二四日までに社員の全員から書面により同意の意思表示を得たので、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第五八条第一項に基づき、当該提案を可決する旨の社員総会の決議があつたものとみなされた。

第八回脚本募集受賞者 令和三年(二〇二二)

最優秀作品 該当作品なし

優秀作品

時代劇部門

篠崎 隆雄氏
〔深川永代戻り橋〕

佳作

歌舞伎部門

山崎 赤絵氏
〔闇夜忍遠賀一族〕

ミュージカル部門

大森 匂子氏
〔二人の孝女〕

現代劇部門

柘植 徳井氏
〔親父〕

現代劇部門

高柳 育子氏
〔三階栗屋の女優たち〕

時代劇部門

浅見 純氏
〔笠売姫〕

編集後記

ここきての規制緩和。あたかも新型コロナが過去の存在にでもなったような今日この頃です。海外からの旅行者の受け入れ拡大、入国検査の簡素化、GoToトラベルで国内旅行の推進。演劇界も収容人数解除でいざ転進！と思いきや、一度は減少に向かっていた感染者数がまたもや増加に転身。関係者の感染で休演する公演も増加中！お客様はまだ回復基調には遠く及ばず。演劇界はまだまだ前途多難です。(Y)

取材・文 高橋 涼子(理事インタビュー)

写真 阿多 亨(理事インタビュー・助成金受賞者・帝劇と山田五十鈴さん)

写真提供 東宝演劇部

// 美馬 勇作(山田五十鈴)

挿し絵 北村 文和(山田五十鈴)

印刷 株式会社 宝田堂

編集・発行 公益社団法人 日本演劇興行協会

発行所 東京都中央区銀座一丁目二七―八

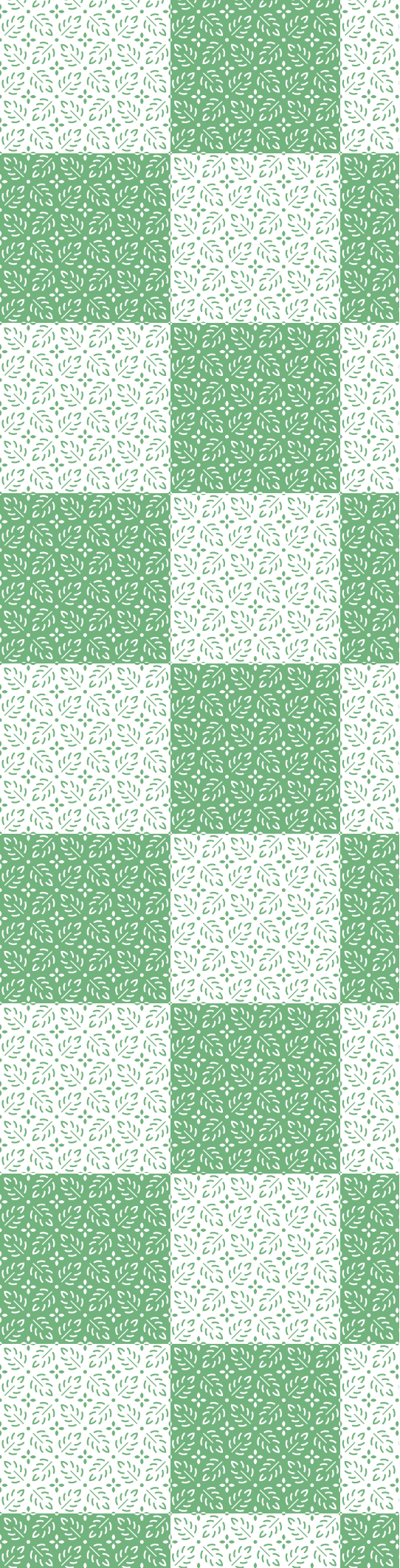
セントラルビル

発行日 二〇二二年七月

不正転売禁止法

2019
6.14
施行

演劇、コンサートやスポーツなどのチケット（特定興行入場券）の不正転売、または不正転売を目的としてチケットを譲り受けた場合、**1年以下の懲役、100万円以下の罰金**、またはその両方が科せられます。



*Japan
Association
of Major
Theaters*